

# ESD 学習と高大連携 ― 地域に貢献できる力を育てる

東洋大学国際学部 教授

子島 進

## 1. はじめに

2004年に東洋大学で職を得て以来、わたしは学生と一緒に、国内外の地域の課題解決のために、さまざまな社会的活動を行ってきた。その中には、中学高校や社会人と連携したものもある。コロナ禍によって、活動が休止状態になっている現在、ESD学習という観点からこれらの活動をふりかえり、高大連携の可能性を探ってみたい。

以下に、これまでの活動を見ていきたい。

## 2. フェアトレード商品の販売と情報発信

フェアトレードは、京都大学の任期付き助手から、東洋大学に助教授として赴任した年に考え始め、翌2005年から開始したものである。

わたしの専門は文化人類学であり、パキスタンを中心に南アジアをフィールドとしてきた。研究テーマは、NGO／ボランティア活動を通じた異文化理解である。NGOやボランティアを「すべきもの、よきもの」として規定するのではなく、文化的な現象として調査・分析している。博士論文で扱ったのは、イスマール派というパキスタン北部に分布するシーア派の少数派である。その村に住みこみ、彼ら彼女たちが行う住民参加型の農村開発を、宗派活性化の一環として議論した。しかし、このような専門的な議論は、講義では1、2時間程度に抑え、より広い視野を学生に持たせる必要があることは、1年目ですぐにわかった。そして、赴任先の国際地域学科（当時は国際地域学部にあったが、後に国際学部に変更）では、Think Globally, Act Locallyを合言葉に、国際協力と地域の活性化の実践を学生に奨励していた。そこで、活用しようと思ったのが、フェアトレードである。

フェアトレードを簡潔に定義すれば、「発展途上国の生産者が適正な利潤を得られるように配慮して行う貿易」となる。世界的にコーヒーの消費が拡大しているにもかかわらず、途上国の生産者が利益を得られず経済的困窮にあえいでいる事例が紹介され、国際協力NGOが率先して取り組み始めた。

わたし自身は、1990年ごろからボランティアとして関わり始めた「シャプラニール＝市民による海外協力の会」で、フェアトレードに出会った。シャプラニールの発足は、1970年代初頭に日本の若者がバングラデシュの農村開発に関わったことを契機とするのだが、活動のかなり早い時期から農村の産品を日本で販売していた。つまり、日本で（おそらく）最初にフェアトレードを開始した団体で、私は幸運なことにボランティアをしていたのである。

2000年代に入っても、フェアトレードは日本社会ではあまり知られていなかった。しかし、見方を変えると、学生たちにとって「未知の領域」であり、新しいものに挑戦するという「わくわく感」があった。学生たちは、商品に関する情報（特に生産者の生活環境や経済状況）を学習し、それをお客さんに提供しながら販売した。さらに、海外研修として生産者訪問を行った（1年おきに、バングラデシュ、フィリピン、ネパールなどを訪問）。

学園祭や町のお祭りでの小規模な販売から始めて、ショッピングセンターの広い会場で数日にわたるイベントを行い、1回で60万円近くを売り上げるまでになった。これは当時暮らしていた群馬県館林市で多くの方々、とりわけアゼリアモール（販売会場）と上毛新聞・館林ケーブルテレビ（情報発信）から全面的な協力を得られたおかげである。さらに市役所の橋渡しによって、地元の中高生と一緒に販売したり、新聞に記事を掲載したりするなどして、



写真1 シリア難民支援といわきの特産品を中心としたフェアトレード販売 (2019年, 館林市)

10年間にわたって活動を継続した(学部が群馬県から東京の白山キャンパスに2009年に移転後も、毎年ではないが館林での販売を行っている)。

文科省のホームページを見ると、「持続可能な開発のための教育(Education for Sustainable Development: ESD)は、地球規模の課題を自分事として捉え、その解決に向けて自ら行動を起こす力を身に付けるための教育です」とある。国際地域学科のミッションとかなり重なることがわかる。そして、「日々のお買い物を通した国際協力」であるフェアトレードもまた持続可能な開発を目指していると言えるだろう。つまり、東洋大学で働くようになって、わりとすぐに手探りでESD学習を始めたということである。

### 3. ネパール復興支援

この活動は、フェアトレード活動のいわば応用編である(現地研修の一環として、2010、2014年の2回ネパールを訪問)。

2015年4月と5月にネパールで大地震が発生した。その被害は甚大で、8,900人が死亡し、家を失った人の数は350万人に達した。東洋大学では「大学としてネパールを支援しよう」ということになり、社会貢献センターとボランティアの学生たちが一年を通して活動を行った。具体的には、募金、チャリティー・パーティー、フェアトレード販売などを組み合わせる形である。集めたお金は被災地に入った国際協力NGOへ寄付したが、それらの団体に白山キャンパスで活動報告(連続公開講座)を行っても

らうことで、ボランティア学生は学びを深めた。販売やパーティー等では、大道芸やアカペラのサークルに、そのパフォーマンスでイベントを盛り上げてもらった。さらに、大学の近所のネパール・レストランにパーティー用のカレーを提供してもらうなど、地域での交流も深めることができた。

この一連の活動を通して、明確にわかったことがある。それは、必要に応じて学内のサークルや有志をネットワーク化すれば、多額の予算を確保しなくても、ユニークな活動を展開していただだけのリソースを東洋大学が有しているということである。

### 4. 福島県いわき市での農業ボランティア

2011年3月に東日本大震災が発生すると、その直後からシャプラニール(わたしにフェアトレードを教えてくれたNGO)が福島県いわき市で支援を開始した。そのつながりを通して、ゼミの学生といわきを訪問するようになるのは、翌12年からである。当初は、放射線の問題が暗い影を投げかけており、活動はきわめて制限されていた。震災当時の話をインタビューして、それを英語に翻訳してSNSで発信することが最初の活動となった。その後、地元NPOが始めたオリーブやコットンの栽培プロジェクトに加わり、農業ボランティアへと移行していった。いわき訪問は、地域農業の活性化の方策や、原発事故を通して環境問題について考える機会を、学生たちに与えてくれる。ESDの観点からも重要なテーマであることから、学部や東洋大学全体のプログラムとしても予算が付くようになっていった。



写真2 コットンの種まき。留学生の参加も多い(2019年, いわき市)

「ボランティア実習」(学科の正規科目)で春と秋に2回、さらに社会貢献センターのプログラムとして、夏休みと春休みに全学部から参加者を募って引率した。これでは一年中いわき行きスケジュール調整をしている状態となってしまうが、参加希望の学生の声に押されて、コロナ前まで年4回の引率をこなしていた。

## 5. Youtube チャンネル Food Project Fukushima (FPF)

FPFは、「いわき訪問後に東京でできる活動を」ということで考えついた企画である。フェアトレード販売を行っていた時期に、商品のカレーを学生と一緒に作って食べることは、すでに何回も行っていた。いわきでのボランティアに参加している東京周辺の社会人にも声をかけ、30人で盛大に第1回を行ったのが2020年1月である。いわきから農家も駆けつけ、わいわいと調理し、食事を楽しむことができた。次は、シリア人の友人を呼んでシリア料理を楽しもう、その次はスリランカからの留学生と・・・と盛り上がったところでコロナ禍となってしまった。

そこで、参加者にいわきから野菜や魚を直送してもらい、自宅で調理動画を作成する方式に切り替えた。国際地域学科のネットワークを生かして留学生や外国人の友人にも依頼し、現在80本超の動画を15言語で発信している。

いわきから食材を送ってもらうにはお金が必要になる。これは社会貢献センターに助成金を出してもらった(もともと、いわきへボランティアを送りこむ交通費・宿泊費が予算措置されていた)。さらに、クラウドファンディングに挑戦して資金を獲得し(約20万円)、学外へ活動の輪を広げていった。

FPFでは、(たとえば)日本人の学生が作った英語の動画を細かくチェックして直したりはしていない。動画で内容は十分伝わるので、たいがいのミスはそのままである。やる気のある学生には、時期をおいて2本目のビデオを作ってもらっている。最初から完璧を求めるよりも、そのほうが建設的だろう。福島への食の情報を、多言語で発信することの社会

的意義は大きいと確信している。コロナ禍が収まった後も、いわき訪問と組み合わせで継続したい。

## 6. 大塚モスクとの交流

2011年6月、初めていわき市を訪問した際に、「避難所で、パキスタン人が作ったカレーを食べさせてもらった」という話を聞いた。「どこのパキスタン人だろう?」と思いつつ東京に戻ったが、しばらくして、それが白山キャンパスから遠くない大塚モスクのムスリム(イスラーム教徒)だとわかった。モスクを訪れてみると、メンバーにパキスタン人が多いことから、すぐに打ち解けることができた。いわきでの支援活動について聞き取りをする一方(この時書いたのが『ムスリムNGO』である)、大学で講義をしてもらったり、学生をモスクに連れて行ったりという形で交流が始まった。

モスクに入り、実際に礼拝の様子を見るのは、ほとんどの学生にとって初めての体験となる。イスラームに関する関心は高まるだろうが、その一方で「一度行けば十分、宗教にはそれほど関心がない」という学生もいるはずである。そこで始めたのがスポーツ交流である。朝霞キャンパスのグラウンドで、東洋大生(ライフデザイン学部と国際地域学科)と大塚モスクの中高生がサッカーをしたのが最初である。その後、大塚モスクが小学校を設立すると、白山の体育館で年に3、4回運動をするようになった。大学生と一緒にリレーをしたり、綱引きをしたりすることは、子供たちにとっても楽しみとなっている。秋の運動会には、保護者もやって来るので、100人超のイベントとなる。ここでの仕掛けの一つとして、保護者に少し多めにお弁当を作ってきてもらい、ボランティアの学生も一緒に食べるようにしている。

2019年には、ゼミで企画を立ててイフタール・パーティー(ラマダーン月の夕方に開催する食事会)を白山で開催した。竹村学長(当時)をはじめとして、80人規模の交流会とすることができた(大塚モスク20名、留学生20名、教職員と学生40名)。

「多文化共生」は、ESDにおいても必須のトピックであろう。コロナ禍となって、対面の活動はできなくなってしまったが、20年の秋から、オンライ

ンで交流している。学生が関心をもつテーマを15分にまとめて、小学校の生徒向けに英語でプレゼンしている。フードロスや気候変動といった社会・環境問題から、自分の出身地の紹介まで内容は多様である。

## 7. 高大連携の可能性

以上、今後の高大連携を念頭に、書き出してみた。可能性をより具体的な形で構想するためのメモを以下に記しておきたい。

まず、フェアトレードについては、すでに館林で中高校生と一緒に活動した経験がある。フェアトレードが日本社会にある程度定着したこともあり(残念ながら期待したほどではないのだが)、いきなり大規模な販売に挑戦する必要はないだろう。たとえば、高校の学園祭に大学生も一緒に参加するといった形が考えられる。事前学習の教材作りとプレゼンを大学生が担当すれば、双方メリットのある活動となる。海外研修を実施する高校がそれほど珍しくない現在、研修の一環にフェアトレード調査を組み込み、それを大学生がサポートすることもあり得るだろう。

いわきへの訪問は、高校でも十分に可能である。スケジュールの都合上、一緒に行くことはできなくても、事前学習の共有は十分に可能である。それぞれの教室(あるいは自宅)にしながら、オンラインでいわきの農家やNPOとつなぐ。そして、訪問後、各自が調理動画を作成する。調理に限らず、動画作成のスキルは、将来必須となるだろうから、ぜひ高校生のときから挑戦してほしい。高校生と大学生が、コミュニティセンターの調理室を使って一緒に料理することも、もう少しすれば可能になるはずである。

ムスリムとの交流で大切な点は、「異文化理解」を強調しすぎないことである。ムスリムの子供たちの多くは日本で生まれ育ち、日本人としてのアイデンティティを持っている。国際結婚の場合は特にそうだが、両親が外国出身でも日本語が一番得意だという人もいる。サッカーをしたり、一緒に食事をしたりしながら、異文化としての側面と同時に「好きなサッカーのチームが一緒だった」といった形で、

共通性についての理解も肌感覚で深めてほしい。

EDS = 持続可能な開発のための教育は、当然だが持続可能でなければならない。楽しくないこと、しんどいことは続かないし、毎回多額の資金が必要なものも「予算は今回かぎりです、終了です」となってしまう。ここで紹介した活動は、基本的にお金をかけなくても実施できるように設計してある。もちろん、予算がつけば、より充実した活動ができるが、なくても続けられることが大事である。そして、本当にお金が必要ならば、高校生もクラウドファンディングに挑戦すればいい。若い世代の社会的活動を後押ししてくれる人は、意外に多いものである。

最後に、教員同士の協働についても触れておこう。ESDの活動を、教育に関する共著論文としてまとめることを提案したい。たとえば、高校の教員は、モスクを訪問したり、一緒にサッカーをしたりした生徒へのアンケートをとる。大学の教員は、ムスリム側のアンケートをまとめ、一緒に論文を書くのである。大学では、教員自身の専門に関する論文に加えて、教育に関する活動や論文を評価する動きが出てきている。文章にまとめることは、活動のマネリ化を防ぐ意味でも重要である。最初からやるのはハードルが高いかもしれないし、毎年もきついただろうが、ぜひ視野に入れておきたい。

ここまで書いてきたような活動は、実はそれほど珍しいものではなく、日本各地の大学が展開している。連絡をとってみれば、案外大学の方でも連携先となる地元の高校を探しているかもしれない。ヒントにさせていただけると幸いである。

## 参考文献

- 子島進(2013年)「ハートバザールのフェアトレード活動—群馬県館林市における活動を中心に—」『国際地域学研究』16号, 12-23ページ。
- 子島進(2014年)『ムスリムNGO 信仰と社会奉仕活動』山川出版社。
- 子島進(2015年)「東洋大学におけるネパール復興支援」『国際地域学研究』20号, 25-35ページ。
- 子島進(2021年)「学生と歩んできたフェアトレード活動」『現場で育むフィールドワーク教育』古今書院, 195-209ページ。
- 子島進・五十嵐理奈・小早川裕子編/東洋大学国際地域学部子島ゼミ(2010年)『館林発フェアトレード 地域から発信する国際協力』上毛新聞社。
- 子島進・藤原孝章編(2017年)『大学における海外体験学習への挑戦』ナカニシヤ出版。